

經濟論叢

第七十九卷 第三號

故 谷口吉彦博士、故 松岡孝兒博士遺影ならびに署名

觀光税の問題点……………	神 戸 正 雄	1
米国外投資の成熟と停滞……………	岡 田 賢 一	14
財政学と国家認識……………	斎 藤 博	37
故 谷口吉彦博士略歴・主要著書論文目録……………		55
追憶文（石川興二・松井 清・河野健二）		
故 松岡孝兒博士略歴・主要著書論文目録……………		69
追憶文（中川与之助・中谷 実・酒井一夫）		

昭和三十三年三月

京 都 大 學 經 濟 學 會

松岡先生を偲びて

酒 井 一 夫

松岡先生の御学恩を受けた者の一人として、先生の御逝去は心の崩れ行くような気持であった。わたくしが京大の学生として先生の演習に参加させて戴いたときから、戦後北海道大学の教授に転ぜられた先生の下にわたくしも勤務していた先生最後の日まで、思えば二十年近くも先生から御指導を受けていたことになる。この間先生もわたくしどもも変転する時代の波に揉まれて、けっして研究生活に安住することはできなかった。先生はあるときは戎衣を御召しになって外地に向われ、またあるときは不本意にも教壇を去って筆を折るを余儀なくされた。わたくしどもも多かれ少なかれ研究生活に没頭できない事情におかれた。こういった時期において、先生御自身ずいぶんと内面的苦しみや、生活上の困難と闘わねばならなかったにも拘らず、つねにわたくしどもの身の上を案じて指導鞭撻を賜わり、曲りなりに研究者への途へ導いて下さったのである。まことに温

情溢るるがごとき御人柄であった。このことは他の人になりたいしても同様であつて、御知友や門弟たちのためにたえず心配し、奔走されておられた。

先生の御学業について、わたくしなどが喋々することは許されないのであろう。しかし、終始学者としての生涯を送られた先生を追憶するに當つて、先生の業績について語らぬわけにはいかない。先生の御著書は比較的少ない。翻訳書を除けば三冊（うち一冊は公文）である。けれども論文は七十編もあり、けつして著作とはいえないであらう。支那事変勃発以後の環境の制約や、戦後は病床に臥すことの多くなつた事情が、長いものを纏めるだけの余裕を先生に与えなかつたのでなからうか。先生の初期の御著作は「金問題研究」に纏められている。この研究において先生の金融理論的基礎は大体において確立されたといつてよいであらう。先生は金数量論批判を通して、金が貨幣商品であり、価値尺度として不可欠であることを明確にされた。当時アカデミーにおいて名目論が盛行する中であつて、この立場はけだし異彩を放つたであらう。

しかも、先生はそこに止まられることなく、信用現象、信用政策の現実的諸問題をこの基礎の下に説明されたのであつた。しかし何といつても、先生の主著は「金為替本位の研究」にある。この名著についてはすでに世評も定まっていることであるから管々しく言うを要せぬが、ただ一言したいのは前著書との

関係である。先生は「金問題研究」を書かれたときすでに、金問題研究と中央銀行研究とは「私が年来企図する私の金融論の二大礎石」というふう述べておられる。その中央銀行研究が「金為替本位の研究」に結実されたのであるが、これは思うに金為替本位の運用が世界的に中央銀行の中心的課題になつていたからにほかならない。金為替は先生によれば、「金と信用との結合者」である。信用理論を金の基礎の上に樹立し、その適用において金為替本位制なる実践的課題の解決を求められたのである。

先生の御著書からも推察されるのであるが、先生の関心はとくに現実の問題に向けられていたようである。支那事変以後先生の興味はアジア地域、とくに印度支那の通貨金融問題に集中して行つた。この期における先生の御論稿には印度支那にかんするものが多数を占めている。印度支那への特別の関心は先生の御堪能なフランス語の關係もあつたであらう。自ら現地に赴かれ、また後には印度支那経済にかんする翻訳書を刊行されている。

終戦後京大の研究室を去り、研究には不利な状況におかれるようになつてからも、先生は倦まず憊まず研究を続けられ、しばしば論文を公表されている。戦後の新しい金融問題を、やはり金を中心にして説明する努力を払われていた。そして「金為替本位制の研究」の新版を作りたといつねつね洩らされ、また

事実丹念なメモを作成しておられるのを拝見した。

先生の研究態度を見ると、つねに資料を疎なく当るといふ注意を払われている。先生は実証的方法を重んじ、たんなる抽象を避けたように見受けられる。この点についてフランス経済学の影響をたぶんに受けておられるようである。先生がアフタリヨンを訳されたことや、先生の御遺稿の中にシミアンにかんするものが見いだされたことは、この間の事情を説明している。

また晩年には「フランス貨幣論」をものしたいと申しておられ、その一部を示すらしい原稿が枕許に残されていたのであった。

御年六十三歳。天寿というにはまだ早いようである。もし借すに数年をもつてすれば、御計画中の仕事も完成され、わが学界に寄与するところ大なるものがあつたらうと深く惜しまれてならない。(一月十九日)